

亞細亞局長  
 第一號  
 發信原稿寫  
 一月七日

亞 件 名	
發 送 名	

REEL No. 1-0182

03 12

○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
奉 天

◎ 關東廳の十一年度豫算總額は一千五百九十二萬二千餘圓にして  
前年度に比し十四萬一千餘圓の減少なり。  
一月七日午後二時三十分發

○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
奉 天 北 京 大 津 上 海

◎ 南滿醫學堂は愈々單科大學に昇格する事に決し認可次第來る四  
月より豫科一年生日支~~支~~坐~~坐~~谷四十名づつを募集する筈なり修業年  
限は内地同様豫科三年本科四年なり。  
一月七日午前十時三十分發

○  
○  
東 方 通 信 發 電 報 寫

奉 天 天 津 北 京 宛  
所 宛  
上 海 廣 東 濟 南

一月七日午後四時半發  
◎大隈侯の容態は略前日と同様なるも衰弱次第に加はりつゝ、  
り本日兩陛下攝政宮殿下より特に侍従を差遣され、  
を見舞たり。

○  
○  
東 方 通 信 發 電 報 寫

奉 天 天 津 北 京 宛  
所 宛  
上 海 廣 東 濟 南

一月七日午後四時半發  
◎五日發華盛頓來電に依れば極東委員會は支那陸軍の縮小を北  
京政府に勸告せん事を討議せりと。

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
奉 天 天 津 北 京 上 海

一月七日午後五時半鐘  
◎大蔵省發表に依る昨年中の貿易額は輸出十二億五千二百餘萬圓輸入十六億千二百餘萬圓合計二十八億六千五百餘萬圓にしてこれを大正九年に比すれば十四億千八百萬圓の減少なり。

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
奉 天 天 津 北 京 上 海 廣 東 濟 南

一月七日午後五時半鐘  
◎五日經青邊野日特電に依れば日本は左の條件にて山東鐵道を支那に譲渡すべしとの意を日本金庫は言明せるが如し  
購入資金は日本の銀行家よりの借款を以てし十二箇年に償却し任意三箇年間に償却するを得べし償却完了迄の間日本は總主任會計監督機關士の三地位に日本人を聘する事  
と云ふに在り然し支那側は日本の鐵道借款提議を頑強に反對せりと別電に依れば日支交渉は無期延擱となれりと。

○ ○  
 寫 報 電 信 發 信 通 方 東

所 宛  
 南 濟 東 廣 津 天 京 北 大 奉 海 上

◎ 大隈侯の病状は稍々女御の  
 を來し主治醫は大に舊狀を  
 祈禱式を行へり。

亞	
件名	發送名

發信原稿寫  
 一月八日

亞細亞局長

第一四

...

○ 寫 報 電 信 發 信 通 方 東 ○

所 宛  
南 濟 東 廣 津 天 京 北 天 奉 海 上

◎ 大隈侯の病状は稍々安静の趣を呈せるも七日夜より心臓の衰弱を來し主治醫は大に警戒を加へ居れり本日早大生は病侯の平癒祈禱式を行へり。

一月八日午后零時發

電報  
一月八日  
發電原稿寫

REEL No. 1-0182

0318

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 大 津 上 海 北 京 廣 東

八日午後三時三十分發

◎最近西伯利の露國人は日本政府の態度を中傷非難し或は全然虛構の事實を捏造宣傳するものあるに對し本日外務當局は事實に基き刊證を擧げて一々之が辯駁を爲せるが大要左の如し

日本政府は露國人の政争に對し常に中立の態度を維持し西伯利の政情安定を待ち遠に撤兵すべきは屢々宣明せる所なり然るに露國人は自派に不利なる事變の發生する毎に日本の態度を非難し客年五月浦鹽政變に際し同地方よりチタ政府の勢力一掃せらるるや日本軍の白黨援助を宣傳せるも日本軍の公正なる態度は當時浦鹽に在りしチタ政府代表者の文書により明なり

最近沿海州に於ける白軍の成功を見るや再び日本軍の白黨援助の宣傳行はれチタ國民議會は世界各國政府に對する假文を決議せり今該假文中事實相違の點を擧ぐれば

一日本軍は尼港を假裝し熱血江水迫を閉塞したりとあるも之れ露人自らの所爲にして加ふるに同地に於て日本人を虐殺せるは明なる事實なり

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

(一)

一日本軍は白軍に武器を供給し内亂を助長し駐兵の口實を得んとすと云ふが如き寧ろ滑稽事と云ふべくメルクロフ政權が日本より武器供給を受け得ずして日本を非難する事實に對するも明なり最近白軍の活動は日本軍とは全然關係なく地方農民の後援と亦軍より分捕せる政權によりて其の勢力を増大したるもの如し

一日本は大連會議に於て駐兵の承認を求め且つ遼東海岸の湖嶺を求むる等極東諸領を其の手中に収めんとするが如き要求を爲したりと云ふは事實を認むべきものにして大連會議は極東諸領に於ける日本人の生命財產並に交通の危險及び日本に對する脅威の除去通商産業等の自由等の保護を得て速に撤兵を實行せんとするものにして何等他意あるに非ず

又華盛頓に於て極東共和國代表者は日佛兩國がウランゲル、セメノフ一派を援助し西伯利を日本の保護國と爲すが如き言約を締結したりとの説を流布し或は文書なるものを發表せるも右は全然虛構の文書にして日本政府及び其の官吏は佛國政府



○ ○  
寫 報 電 信 發 信 通 方 東

所 宛

(三)

附 又 は 其 の 他 の 何 人 と も 此 の 如 き 交 渉 を 爲 し た る 事 絶 對 に な  
し 以 上 の 如 き 虚 構 の 事 實 を 流 布 し 各 國 民 間 に 不 信 不 和 の 種 子 を  
播 かん と す る が 如 き は 最 も 惡 辣 な る 國 際 的 罪 惡 な り 云 々 。

○ ○  
寫報電信發信通方東

所 宛  
市 町 界 廣 界 北 海 上 部 大 大 部

○ 大 候 候 の 昨 夜 九 時 頃 の 音  
引 續 き 暗 帳 状 態 に 亦 も  
を 表 示 し 該 候 に 音 品 を 發  
は 一 候 に 宛 呈 し 本 九 日 を

發  
信原稿寫  
一月九日

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

苑 所  
奉 天 大 津 上 海 北 京 廣 東 濟 南

八日午前八時發

○大隈侯の昨夜九時頃の容體は脈搏細滞に近く心臓刻々と弱り引續き暗眠状態にあるも醒覺の時は左右に對し動作にて意思を表示し微かに言語を發することもあり此の日見舞の脱近者は一様に絶望し本九日を危候の高潮にありと憂慮し居れり。

○ ○  
寫報電信發信通方東

所宛  
天奉海上

◎九日長崎來電 九日午前四時長崎市本下町より發火百三十戸を  
燒失せり。  
一月九日午後四時三十分發

○ ○  
寫報電信發信通方東

所宛  
京北東廣津天天奉海上

◎華府會議全權の隨員法制局長官横田千之助氏及憲政會を代表し  
て同會議視察に赴ける望月小太郎氏は九日午前サイベリヤ丸に  
て無事横濱入港直ちに入京せり。  
一月九日午後四時三十分發

亞  
 件  
 名  
 續  
 込  
 名  
 純  
 正  
 考  
 信  
 原  
 稿  
 字  
 7  
 9  
 4  
 2  
 一  
 七  
 本

REEL No. 1-0182

0324

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 天 津 上 海 北 京 廣 東

○ 大隈侯の葬儀は日比谷公園にて國民葬として執行され三日同一  
 般民衆より告別の禮を受くる事となすべしと傳へられ或は國民  
 とすべしとの説あるも未だ共に決定に至らず。

十日午前十一時三十分發

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 天 津 上 海 北 京 廣 東 濟 南 滄 州 煙 台 大 連

○ 至急報 大隈侯は十日午前四時三十分遂に薨去せり。

十日午前七時三十分發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
東 廣 天 奉 海 上 京 北

○陸軍大將田中義一氏は十日比律賓地方へ出張を命ぜらる出發は  
本月下旬頃なるべし右は過般比律賓新總督ウツド將軍來航の  
答禮旁々同地方視察の爲なりと。

一月十日午后四時三十分發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

天 奉 天 津 上 海 北 京 廣 東 附 附

○國民黨は九日師團半減論を發表せり。  
十日午前十一時三十分着

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

二

に取り大なる不祥事なるも憲政會に取りては一大損失なり然し侯生前の素懐は今や各方面に其土臺を築き上げ居れば侯の死が直接現下の政局に影響ありとは思はれず某貴族院議員曰く憲政會も侯なき後は加藤に對する一部の不平も自然に緩和され共に共に内部の結束を固めて外部に當るに至らん尾崎行雄氏曰く侯の晩年は實際政治に遠ざかり言論により指導の任に當り居たる爲直接政界には大なる波動を與へざるべきも侯の死は影響する處廣くして緩かに原氏の死は狭くして僅かりしと詳すべきなり其他多數名士亦世界的偉人として侯の死を惜み居れるが直接政界には影響なかる可しと云ふに一致し居れり。

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

一 上 海 北 京 奉 天 天 津 廣 東

一月十日午後五時三十分發  
◎大隈侯重態に陥り以來新聞紙は連日侯の病狀を詳報する外事業逸事等を報道し居れるが本朝薨去の報傳はるや侯邸は弔問者により非常なる混雜を極め早稻田大學は臨時休業し侯邸を中心とせる一帶の町民亦業を休み戸を閉して弔意を表し居れり各夕刊新聞は更に哀愁の情深く侯生前の各種の肖像寫眞等を掲げ全紙を擧げて侯が薨去の慘狀を報ずると共に朝野各名士の辭と影響等を掲げ何れも侯の偉大なる政治家にして國家の爲め大なる損失たるを惜み居れり高橋首相曰く日本の地位の向上するに従ひ國際的關係亦益々複雑多端たるべき秋に當り侯の如き世界的政治家を失ふは國家の爲め大なる損失にして私情としても痛惜に堪へざる次第なり内田外相曰く政府及び外交當局としても大なる打撃なり侯が常に對外問題に心を盡し外人に對し日本の立場を憚々として説明して平和に圓滿に解決せる事尠なからず若槻憲政會總務曰く侯の如き一世の偉人を失へるは國家國民



○ 寫 報 電 信 發 信 通 方 東 ○

所 宛

東 京 廣 島 大 阪 神 戶 北 海 上

◎大隈侯重態に陥りし以て衆議院  
 業起事等を撤追し居れるが  
 により非常なる混雜を極め  
 とせる一帯の町は亦衆議院  
 各夕刊新聞は更に其勢の  
 増進を期して決が其の  
 形勢を期して決が其の  
 る損失たるを雷みたり  
 尚爾首を曰く 日本は地位の  
 艱難多端なるべき欲に當り  
 の為め大なる損失にして私  
 内閣外相曰く 政府及び外  
 に對外問題に心を盡し外人  
 して平和に圖るに併せて  
 若くは政府の曰く 決

亞 件 名	
發送 名	

發信原稿寫  
 一月十一日

亞細亞局長

七

# 東方通信發信電報寫

所 宛

東 廣 津 天 天 津 京 北 海 上

一月十日午後五時三十分發

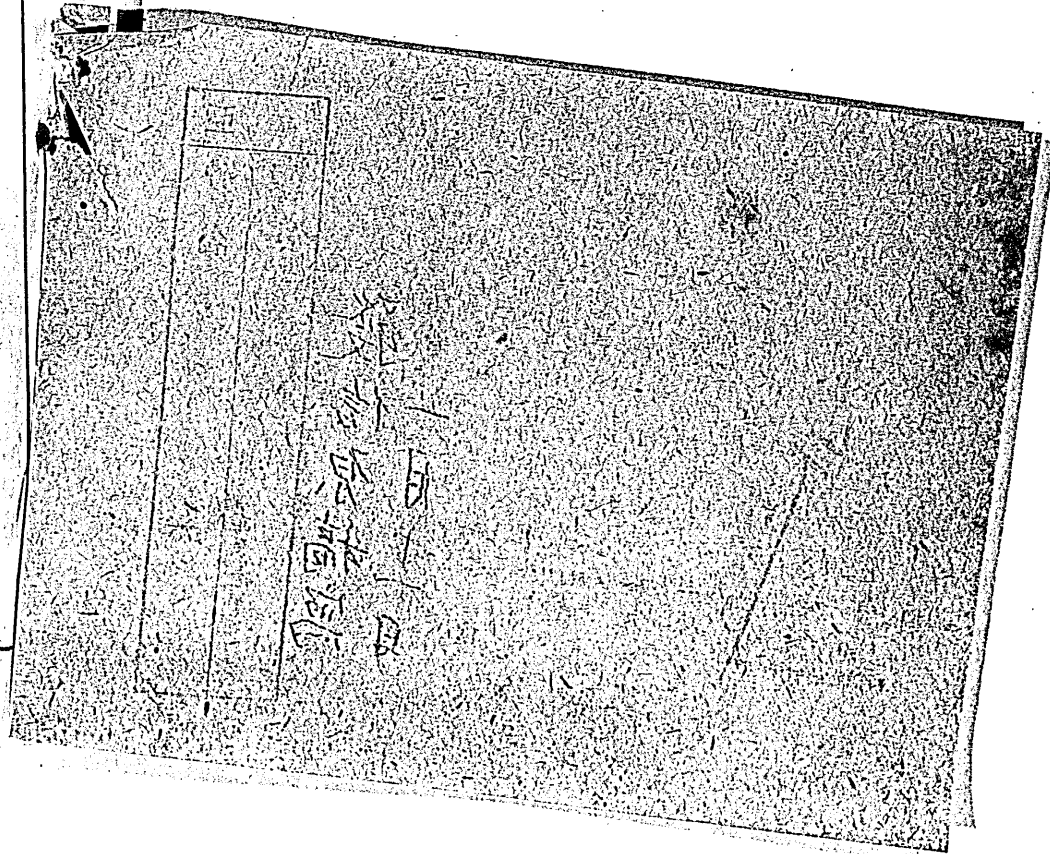
◎大隈侯重態に陥りし以來新聞紙は連日侯の病狀を詳報する外事業逸事等を報道し居れるが本朝薨去の報傳はるや侯邸は弔問者により非常なる混雜を極め早稲田大學は臨時休業し侯邸を中心とせる一帯の町民亦業を休み戸を閉じて弔意を表し居れり

各夕刊新聞は更に哀感の情深く侯生前の各種の肖像寫眞等を掲げ全紙を擧げて侯が薨去の狀を報ずると共に朝野各名士の辭と影響等を掲げ何れも侯の偉大なる政治家にして國家の爲め大なる損失たるを惜み居れり

高橋首相曰く日本の地位の向上するに從ひ國際的關係亦益々複雜多端なるべき秋に當り侯の如き世界的政治家を失ふは國家の爲め大なる損失にして私情としても痛惜に堪へざる次第なり

内田外相曰く政府及び外交當局としても大なる打撃なり侯が常に對外問題に心を盡し外人に對し日本の立場を惇々として説明して平和に圓滿に解決せる事少なからず

若槻憲政會總務曰く侯の如き一世の偉人を失へるは國家國民



○ 東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

(一)

に取り大なる不祥事なるも特に憲政會に取りては一大損失なり然し、侯生前の素懐は今や各方面に其土壘を築き上げ居れば侯の死が直接現下の政局に影響ありとは思はれず

某貴族院議員曰く、憲政會も侯なき後は加藤子に對する一部の不平も自然に緩和され共に共に内部の結果を固めて外部に當るに至らん

尾崎行雄氏曰く、侯の晩年は實際政治に遠ざかり言論により指導の任に當り居たるが爲め直接政界には大なる波動を與へざるべきも侯の死は影響する所廣くして緩かに原氏の死は狭くして鋭かりしと評すべきなり

其他多數名士亦世界的偉人として侯の死を惜み居れるが直接政界には影響なかるべしと云ふに一叙し居れり。

○ 東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 天 津 上 海 北 京 廣 東

一月十一日午後三時半發

◎支那政府の九千萬元借款に關し傳へらるる所に依れば最近支那の政情益々混亂するに至り英米の態度は大に躊躇するに至り日本側の態度も銀行者側の意見と一致せる結果果反對に決したる模様にして其の主要なる理由は

一、支那の現状が益々不安を來しつつある事

二、梁内閣成立不人氣にして該借款に付ても既に上海方面に反對の氣勢を擧げつつある事

三、如斯形勢なれば支那が如何に辦ずるも其金を軍備に消費し益々内亂を増長する處れある事

寺に在りと。

東方通信發信電報寫

宛 所

天津北京上海廣東奉天

◎大隈侯の死に對し本日(十一日)のジャパンアドヴァタイザーは曰く 侯は明治の歴史に於ける民主的進歩的方面を代表せる一大偉人なり彼の一九一四年より一六年に至る侯最後の内閣の如き(遺)の諸案を(遺)けて新政府を組織せるに思ひもかけざる世界大戦に當り却つて支那に對し彼の二十一箇條の要求をなすの(遺)除儀なきに至り茲に老侯は官僚寺が唯自家の便宜の爲めに政府を擁立し或は之を破壞するものなるを事新しく(遺)察せり。

十一日午後四時半發

東方通信發信電報寫

宛 所

北京上海天津

◎滿鐵疑獄事件第一回公判は本日開廷江木、花井、鶴澤等の各辯護士列席の上(遺)連炭坑買収に關する事實問へあり明日も續行の(遺)塔

十一日午後四時發

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 大 連 青 島 上 海 北 京

○ 大隈侯の長逝に對し本朝の新聞は昨夕に引續き殆ど全紙を擧げて同侯の記事を掲げ尙ほ各款其軼説に於て弔詞を掲げ何れも侯が維新時代より國事に盡瘁せる閱歴を敘し改進黨を組織して日本憲政の基礎を固め更に教育事業に着目し今日の早稲田大學を起して人材の養生に努めたる守世の門人も企及すべからざる大事蹟を述べるのみか其の名聲は遠く歐米人の間に傳へられ或る意味に於ける日本を代表するものとも見得べかりしに今やこの偉人を失ふ國家社會の爲め痛惜の至りなりと被弔の意を表し別に諸名士の大隈侯諱を以て紙面を埋め居れり之によりて見ても侯が如何に國民的崇敬の中心たりしかを知るべく今更に此感を深刻ならしめたりと云ふべきなり。

十一月十日午後十時三十分發

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

上 海 奉 天 天 津 廣 東 東 北 京

○ 大隈侯の死に對し本日兩陛下漸次宮殿下侯邸に勅使を遣し遺族に對し優渥なる慰問の詞を賜はれり尙侯邸は相次で到る弔問者により雜沓を極めつつあり。

十一月十一日午後五時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 天 津 北 京 上 海 廣 東

◎十七日大隈侯の自邸に於ける告別式参列者は親戚に限り式後早稲田大學は校葬の禮を以て教職員生徒一萬餘人は靈柩を護りて日比谷の國民葬式場に至る事となれり向は侯と關係深かりし女子大學々生二千數百名も之に列する筈なり國民葬に關し三宅雪嶺博士曰く 内へ國葬とするも國民が衷心より弔意を表せずんば國葬の權威ある大隈侯の如き民衆的偉人の死に對しては大臣も労働者も一筋に弔意を表し得る自由開放の國民葬こそ眞に相應しき事なり云々。

十一日午後五時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 天 津 上 海 北 京 廣 東

◎大隈侯の葬儀は十七日午前十時より早稲田の自邸に於て告別式を行ひ同日直ちに晉翁の護國寺に埋骨する事となれるが各方面よりの熱心なる希望により自邸の告別式<sup>後</sup>に靈柩を日比谷公園の式場に移し國民葬となし一般の参拜を許し大伴八の最後を送る事となれり。

十一日午前十一時半發

空  
 郵  
 送  
 品  
 一  
 冊  
 發  
 信  
 原  
 稿  
 寫  
 一  
 月  
 五  
 日

亞 件 名	
綴 込 名	

○ ○  
寫報電信發信通方東

所宛

東京 上 奉

十二日午前十一時半發  
○佛國特派大使ジョツフル元帥は二十日佛國軍艦モンカルム號にて横濱着港即日入京二十一日攝政宮殿下皇后陛下に謁見後宮中にて午會を催さるる筈なり。

○ ○  
寫報電信發信通方東

所宛  
海 上 京 北 大 奉

一月十二日午後三時發

◎原氏没後の今期議曾は極度の意味に於て有向る方面の社意を志き加ふるに内外多岐の重大事件の難言し居る事として政府は黨内に在野黨の作戦如何は頗る注目され居るが今三股の討論政策とも見らるべきものを標榜するに政府は原氏の没後原氏の結果に強硬を來しつゝあるが幹部は山本義徳の意向を容れ政府とも交渉して同議を固り党内面議に努め居れり而して反對黨の攻撃は日たるべき普通凶惡策に對しては先年八擴張を為れる以來更に取止を必要とする程は強硬し居らず敢て更に原氏の試練と疑念とを積みたる後原氏に昔法を實施するを適當とす

海軍事件。阿片事件。は原氏非に公判の進行に見て政府及政黨に關係なきは明なり

財政計畫。經濟政策等。例も時勢に適當なる方策を採り外交問題亦適當の解決を固り居れりと云ふに在り只強硬教育費國庫補助金水収等に加きては管内にも之を要求する聲あれば幹部は相當苦心し居れるか如し



東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

(二)

憲政會としては第二黨としての信を天下に示すべく正々堂々の陣  
 を張るべしとの聲黨内に靡ち居り外交問題に關しては華府會議の  
 失敗より對支外交對西伯利問題等に關し論難の矢を放つべく内政  
 方面にては國民生活を不安にし國民思想を惡化せしめしのみなら  
 ず外國貿易を不振ならしめし物價問題に對する無定見放漫政策の  
 行詰り行政財政税制の三大整理斷行の急務昇格問題教育費國庫備  
 助問題制滯正問題等に逐且り大に論難すべく普選問題に關して  
 は獨立の生計を濫削減し各派との提携により政府に肉薄し大に政  
 府並に與黨の不法を改めて不信任案を提出するに至るべし國民黨  
 は全然自由の立場に在りてあく迄是々非々主義により此批判を試  
 むべく既成政黨が黨議により議員の自由の行動を束縛し來れる當  
 面を破り各議員の自由裁量によらしむる事とせるにより大に他黨  
 にも刺戟を與ふるに至るべし師團半歐議の如きも必ず提出せらる  
 べく普選問題、分團立法、教育の振興、物價調節黨友黨と提携  
 し或は單獨にて大に政府に突撃するに至るべきも突發同事變の起  
 る事なき限り今期議會も大勢上政府の防利たるべしと一波に觀測

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

(二)

され居れり

現在下院の各派別議員數左の如し

憲政會	二八二
國民黨	一〇九
民中俱樂部	二七
無所属	二六
	一八

(了)

○ 東方通信發信電報 ○

奉 天 施 所

十二月十四日午後四時半  
◎ 十二日午前出動の途中にあり八幡製鐵所長官白仁武氏の自願  
車は製鐵所北門前鐵道と踏切にて列車と衝突し長官は生命は  
取止むべきも重傷を負ひ同乗の柳澤取賣部長と運転手は生命  
危篤。

東方通信發信電報寫

宛 所

東京通信電報局

○大正時代の長途に對する支加  
に對する代金公使旅元部長は  
時に取外交部長の申出をも

亞細亞局長  
第一號  
本

發信原稿寫  
一月五日

亞	
件名	
發送名	本稿

○  
寫報電信發信通方東

所宛

東京 北京 上海 天津 大連

○大隈侯の長遊に對する支那政府の懸念なる弔電昨日支那公使館に到着代理公使張元帥氏は自ら函に之を大隈侯に致せり氏は同時に顧外交總長の弔電をも得たり。

十三日午剛七時四十分發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 津 上 海 北 京 濟 南 青 島 東 洋

十三日午前十時發  
○十一日華府發朝日特電 十一日午後の山東交渉にて支那は本協  
定の成立如何に關なく即時撤兵を主張したるが結局山東鐵道沿  
線は本協定兩印後撤兵を開始し若し出京待べくんば三箇月内退  
くも六箇月内に完了せしめ青島は行政引渡完了すると同時に撤  
兵を開始せしむるも六箇月以内に完了する事に決定せり。

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 津 上 海

十三日午前十時發  
○世界的庭球選手清水管造氏は昨日宮城縣某資産家の令嬢と結婚  
せるが氏は攝政宮殿下より下賜されたフロツクコートを着用し  
て式を擧げたり。

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 海 州 上 海

◎大蔵省発表 十二月中の日本の對支貿易は輸出二千七百七十六萬圓輸入一千四百八十二萬圓にして差引六百九十四萬圓の出超を示せるが大正十年中の累計は輸出二億七千四百五十三萬圓輸入一億七千八百四萬圓にして差引九千六百四十九萬圓の出超なり。

十三日午後三時三十分發

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 海 州 上 海 北 京 東 京

◎梁内閣成立して未だ幾何ならざるに吳佩孚氏を中心とせる直系派の反對により又<sup>後</sup>内訌を生ずるに至れるは支那の爲め憂ふべき成行なりとて十三日時事は社説に於て吳氏の梁内閣への反對運動は内閣の運命に關するのみならず或は直奉兩派の争鬭となるに至るかも知るべからず折も折華府に於ける日支全權の直接交渉が新内閣反對の有刀なる口實となり吳氏が新年早々北京に通電し梁氏は小幡公使と交渉したる未既に借款鐵道のことを承諾せりとの誤聞に基きて之を賣國的行爲なりと彈劾し新内閣に對し極端なる敵意を表せるに至れるか名を對日問題に粘り小徳の行動に出づるが如きは他國の迷惑を顧みざる言動と云ふべく目下華府に於て列國が多く支那問題を議しつつある際内訌を案からしむる所きは小心得の甚たしきものにして切に支那の獨立ちたる人々の反省を促さざるを得ざるなり云々と論ぜり。

十三日正午發

亞細亞  
 第一號  
 發信原稿寫  
 一月五日  
 亞  
 件名  
 發信原稿寫  
 一月五日

REEL No. 1-0182

0342

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 天 津 上 海 廣 東

○大阪以西は十三日夜よりの降雪の爲め電線の被害甚だしく十四日朝八時頃より大阪下の關向の電信不通となれり。

十四日午後〇時半發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 北 京 上 海 廣 東

○支那に再亂の兆ありと題し十四日讀賣は大要左の如く論ぜり  
一月十四日正午發  
張作霖氏は段祺瑞氏に次ての武斷主義者として支那國民の最も憎惡する所なり其傀儡となれる梁内閣が同じく國民反對の役<sup>待</sup>に立つべきは豫定の運命にして直隸派の反對運動は此點に於て大に便利なり而して軍閥相提携し居る間は國民の力若くは外國の力によりては之を倒し得ざるも彼等が各々其力を以て相争はゞ相倒に至るべく北方自身の軍閥又は南北双方の軍閥をして互に自ら争はしめ共に倒れしむる事は支那の時局を推進せしめ民衆の力を伸展せしむるの最捷徑として吾人は新~~軍~~に聞かれんとする支那再亂の兆を喜ばんとするも言<sup>う</sup>積々非人情に似たるも決して然らず云々。



○ ○  
寫 報 電 信 發 信 通 方 東

所 宛

天

◎ 全國普選開行同盟會以來  
次で二月五日を以て普選  
全國主要都市に於て普選  
くる旨。

藤込名  
發信原稿寫  
一月十七日

亞細亞  
七

○  
寫報電信發信通方東  
○

所 宛

天 壽

◎ 全國普選斷行同盟會は来る二十二日東京市内に演説會を開き  
次で二月五日を以て普選デーと定め同日午後一時より一齊に  
全國主要都市に於て普選大會を開催し大に普選案の氣勢を昂  
ぐる筈。

十七日午前十時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 北 京 上 海

◎ 軍縮による來年度海軍取算の二億圓の處分に就ては條約の批准に先立つて豫算の修正を爲すは不可能なるを以て今般議會に於ては其儘の協賛を求め今秋九月頃臨時議會を召集して取算の組替を行ふ筈なりと。

十七日午前十一時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

奉 天 天 津 上 海 北 京 廣 州 汕 頭

◎ 十六日陸軍省に於て山梨陸相、上原參謀總長、川村元帥、山比秋山、柴、大井の各大將寺藥合軍備整理に關する秘密會議を開けり未だ成案を得るに至らざりしも歩兵一年半服役論、各科の平時定員減少論等を中心として論議講究されしものにて此種の會台は今後尙一二回催さるべく結局今議會に於て該軍制改革に對する新方針の聲明を見る事となるべしと噂せらる。

十七日午前十時五十分發

東方通信發信電報寫

所宛  
奉天北京上海天津

一月十七日午後五時三十分發

◎十八日宮中に於て新年歌詠會始を催さる、管なるが米田大使チヤイレヌ、ビー、ウオレン氏は特に右式場に召を受け同大使館謝武官バーネット大佐夫人も同時に拜觀を許されたり、爾氏とも日本文にて新年勸題題光照波を詠したるものなるが新年歌詠會始に外國人特に大使の御召は空前の事なり。

東方通信發信電報寫

所宛  
奉天天津上海北京廣東濟南

十七日午前十一時半發

◎六限候の葬儀は本日午前七時早稻田邸の告別式に始まる、勅使皇后宮御使、東宮御使の御拜あり、次で靈柩は儀仗兵に護られ早稻田を發し日比谷齊場に向ふ、正午十九發の弔砲と共に國民葬開始、偉人の靈に告別禮拜する者あらゆる階級を網羅し數十萬人と稱せらる、空前の盛儀なり、尙靈柩は本日薄暮護國寺に埋葬さるべし。

東洋通商銀行  
第一號  
發信原稿寫  
月十九日  
和  
本

REEL No. 1-0182

0348

○  
○  
寫報電信發信通方東

所宛  
京北東廣津天天奉海上

一月十九日午前十時四十分發  
◎佛國特使ジョツフル元帥の乗艦モンカルム號は十八日朝關門海  
陸を通過し雨中なりし<sup>12</sup>、拘らず兩岸より盛んなる<sup>12</sup>は迎を受けた  
り同艦は十九日夜館山灣に假泊軍艦金剛の出迎へを受け二十日  
朝横濱入港元帥は正午入京の豫定なり。

○  
○  
寫報電信發信通方東

所宛  
鹽浦

一月十九日午後二時二十分發  
◎宿願開會後問もなく休會となりし議會は愈二十一日再開の管な  
るが今期議會は原氏没後高橋子新首相となり且内外重大案件觸  
轉し居る事とて各政黨の態度は一般の頗る注意する所となり居  
れるが政府黨たる政友會は原總裁没後兎角強硬せんとする意は  
の結束を計ると共に現内閣の政策擁護に努めんとするに對し反  
對黨たる憲政會は外交問題に關してはワシントン會議の失敗よ  
り對支外交、シベリア問題等に關して糾彈すると共に内政方面  
にても國民思想の恐慌外國貿易の不振、物價騰貴其他の諸問題  
に就き強硬の矢を放つべし國民黨は全然自由の立場にあり是々  
非々主義に依りて進むべく同盟の新主張たる開會半議論の如き  
も必ず今期議會に提出せらるべし而して善悪是非は在野政黨  
に無所忌憚が一致以て政府に内迫せんとする題目なるが政府黨  
は多數に據り之を一蹴し去るべきも其他重要問題少からざれば  
相當の波瀾は免れざるべく觀測され居れり下院現在各派派別  
左の如し

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

◎ 關 東 報 主 川 島 總 三 郎、三 谷 長 次 郎 の 附 氏 は 元 關 東 報 社 長 中 西 清  
一 氏 を 親 手 取 り 本 日 東 京 地 方 裁 判 所 に 二 十 萬 圓 の 損 害 賠 償 の 附  
帯 訴 訟 を 提 起 せ り 右 は 裁 決 不 正 買 収 事 件 に 關 係 する も の に し  
て 此 の 結 果 と し て 成 信 報 社 報 社 に 對 して 裁 決 せ ら れ る と する 關 東 報 社 の  
報 告 書 公 表 の 已 び 無 き に 基 づ いて 考 へ ら れ ず と。

十 九 日 午 五 時 發

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
二

無 所 屬	庚 申 俱 樂 部	國 民 黨	憲 政 會	政 友 會
一 八、	二 六、	二 七、	一 〇 九、	二 八 二、

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛 浦 鹽

一月十九日午後五時半發

◎憲政會は十九日當地に大會を開き對議會の陣容を整へたるが  
 席上加藤總裁は其演説に於て先づ同黨年來の主張たるシベリ  
 ア撤兵の必要を高潮し今日尙依然之が斷行を見ざるは眞に遺憾  
 は堪へずと言ひ華盛頓會議に於ける日本は全然失敗にして斯  
 かる協定に賛同したる日本全體の態度に就きては評するに語  
 なしと論じ更に内政問題に就き憲政府の放漫なる政策を痛詆  
 し陸軍縮小の必要を力説したる後其結論に於て今期議會は實  
 に滿三年に亘る政府失敗の總評定を爲すべき機會なりと述べ  
 たり。

東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛 奉 天 津 北 京 上 海 廣 東

一月十九日午後五時半發

◎憲政會は十九日大會を開き二十一日より再開の議會に對する  
 陣容を整へたり席上加藤總裁は現下の諸問題に關する演説に  
 於いて先づ同黨年來の主張たるシベリア撤兵の斷行を高潮し  
 ワシントン會議に於ける日本は全然失敗にして斯かる協定に  
 賛同したる我全體の態度に就きては評するに語なしと言ひ殊  
 に補充續の計費に至る迄等級を設け永久に亘りて國際的不平  
 等を設定し國權の大なる制限を確定するは國際法並に憲法の  
 精神に顧み甚だしく當を得ざるものなるが如しと指摘したる  
 後山東問題に言及して曰く

本問題に對する日本の根本方針は日清國交斷絶以來一貫し懸  
 居れり然るに政友會内閣は頻りに遷附を急ぎ無に風々主義の  
 讓歩、衆利の拋棄を爲し主客全く位置を顛倒し支那をして時  
 日だに遷延せば支那の利益倍々加はるとの念を起さしめたる  
 觀なき能はず然かも此問題を擧げて華盛頓に於ける交渉に移  
 したるは列國容諒の機を誘ひ易きに至らしめたるものにし



○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
油 鹽

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

一月十九日午後五時五十分

◎ 華盛頓十九日發 山東領山は日支合辦にて經營するに決定せり。

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
二

て政府にして英米等の裁判に待つ意志なしとせば全く無用の事を爲したるものと謂ふの外なしと

總裁は更に内政問題に就き政府の放漫なる政策を難詰し陸軍縮小の必要を力説したる後其結論に於て今期陸台は實に滿三年に亘る政府失政の總勘定を爲すべき機會なりと述べたり。

○  
寫報電信發信通方東

所宛  
鹽油

一月十九日午後五時五十分發  
◎華盛頓十八日發 幣原全權は支那に於ける天然資源の開発と  
利用は支那及在支他國民の幸福増進の爲め最も必要なりとの  
趣意に基き支那開發決議案を提出したるが支那全權施肇基は  
之に對し同様の希望を有する旨肯定的意見を述べたり。

東方通信發信電報寫

宛 所  
奉 天 上 海 北 京

◎十七日舉行せる愛知石川兩  
に歸せり。

亞細亞電報  
第一編

為 報

發信原稿寫  
月二十日

亞	告	名
細	行	社
電	信	有
報	限	限

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
奉 天 上 海 北 京

◎ 十七日舉行せる愛知石川兩縣の補缺戰は兩縣とも政友會の勝利に歸せり。

一月二十日午前七時三十分發

○  
○  
東方通信發信電報寫

宛  
所  
滬  
郵

○北京十九日發 支那政府は鹽稅剩餘金を擔保とし千四百萬元の國庫債券を發行する事に決定し支那銀行團之を引受くる事となれり。

一月二十日正午發

○  
○  
東方通信發信電報寫

宛  
所  
奉  
天  
上  
海

○十九日夜社會主義者堺利彦氏を殺害せんとて短刀を携へたる者堺氏宅を訪ね面會を求めたるが警官の爲取押へられたり、右は住所不定大塚達靜(二七)とて反社會主義的傾向を有する無賴漢なる事判明せり。

一月二十日午前十時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
上 海 奉 天 天 津 濟 南 廣 東 北 京

◎ ジョッフル元帥は本日正午熱盛なる歓迎裡に無事入京せり。  
一月二十日午後〇時二十分發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
北 京 廣 東 奉 天 天 津 上 海

◎ 本日の各地新聞は何れもジョッフル元帥歓迎の辭を掲げ、世界大戦時にマルヌ戦に於ける元帥の功績を稱揚し斯かる世界的偉人を迎ふる日本國民の熱誠なる喜を披露すると共に日佛外交の倍々親善なるべきを慶賀し居れり東京日々曰く 日本は佛國に對し英米兩國に對する如き濃厚なる政治的關係なきも文化的關係は兩國以上に濃厚なり日本人はよく偉大なる佛國々民族を理解し激賞す元帥今次の來朝は日本國民の最も喜ぶ所にして佛り兩國の國交を親善ならしむるのみならず世界の平和を増進する上に偉大なる効果を齎すものと信ず云々。

一月二十日午後〇時十分發

○ 東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 津 滬 寧 漢 北 京 鄭 州 長 沙 重 慶 蘭 州 西 寧 青 島 濟 南 煙 台 石 家 莊 張 家 口 包 頭 歸 綏 綏 德 蘭 州

二十日午後一時四十分發  
 ◎國民黨は本日當地に大會を開き宣言及決議を際可決せるが席上  
 犬養毅は其演說に於て先づ廢藩置縣の要を説き行政の改革、  
 軍備の削減を主張したる後同黨の新主張たる師團半編論に及び  
 最後は選挙法の改正、労働立法の緊急施設を刀記せり。

○ 東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛

奉 天 津 滬 寧 漢 北 京 鄭 州 長 沙 重 慶 蘭 州 西 寧 青 島 濟 南 煙 台 石 家 莊 張 家 口 包 頭 歸 綏 綏 德 蘭 州

二十日午後〇時二十分發  
 ◎ジョツフル元帥は本日正午熱誠なる歓迎に無事入京せり。

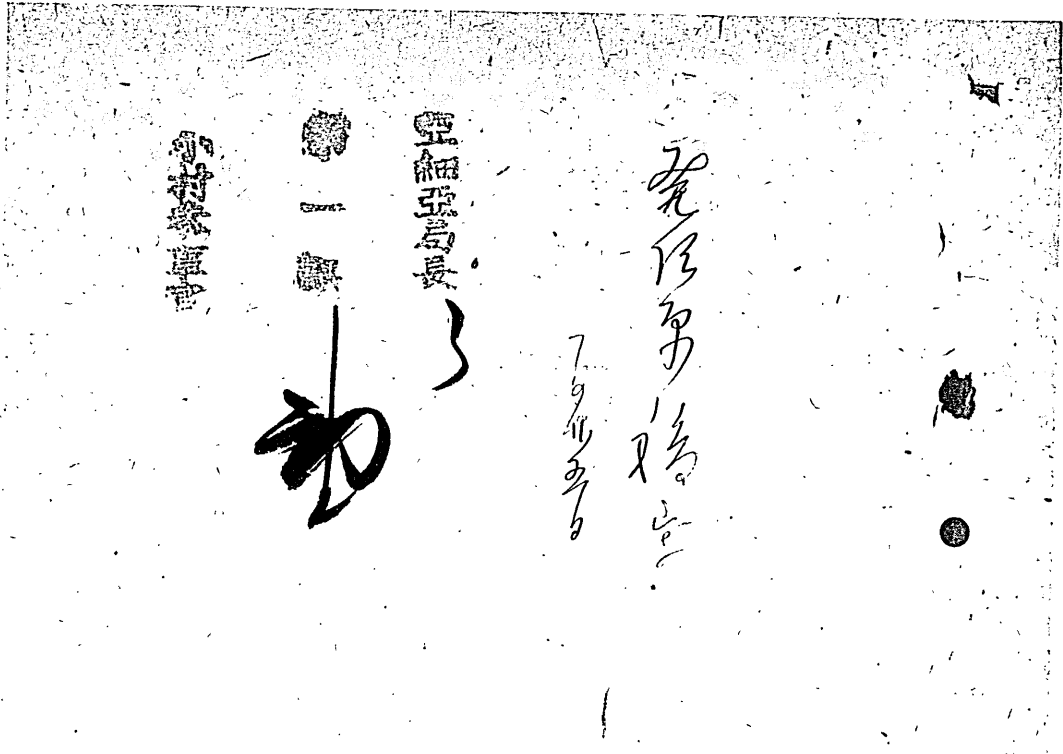
# 東方通信發信電報寫

所 宛  
津 天 滬 上 京 北 天 奉

一月廿五日午後五時發

◎ ジョツル元帥の乗艦モンカルム號は本日午前十時金剛艦に導かれて横濱港に入れり、元帥はランチにて乗附けたる渡邊接伴委員長、井上知事、久保田市長、佛國大使等と艦上にて挨拶を代はしたる後、夫人令嬢並に隨員を従へ汽艇に移乗して上陸、佛國々歌の奏樂裡に東京に向へり、東京驛にては市民及び文武百官の更に熱誠なる歡迎を受け、直ちに自動車にて宿所に充てられたる岩崎男邸に向ふ、此日の歡迎は横濱も東京も頗る盛大を極め、海軍航空隊が佛國艦の飛行機を飛翔せしめ、可憐なる小學男女生徒が歡迎旗を打ちふりたる、殊に元帥を喜ばしめたるもの、如し、尚ほ元帥は本日より五日間宮廷賓客となり、以後三週間は政府の賓客として遇せらるべし。





REEL No. 1-0182

0360

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

通 信

○華盛頓廿三日發 東支鐵道に關し米國々務卿ヒュース氏は分科  
委員會の取るべき方針に付て曰く 該鐵道の管理に關し米國政  
府は該鐵道貿易の通路として維持せられ各國に對し差別的待遇  
をなさしめざるにありて米國は其の職權又は管理權を望まず只  
有別なる運轉を求望す分科會の任務は鐵道の機能を發揮するに  
有別なる管理を維持する上に何等かの方策なきやとの實際問題  
を議すべきにあり。

廿五日午前十一時三十分發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所

通 信

○北京廿四日發 大總統の旨に於て廿三日より一週間梁總理の請  
暇を許し顏外交總長を臨時代理總理に任命せり直隸派は後任總  
理に王士珍を擁して盛に活躍し居れるに反し奉天派は傍觀的態  
度を持して動かざるも梁總理は張作霖の擁立せるものにて今回  
の政變により奉直兩派の提擡は全く破れ今後の形勢は大に注目  
され居れり。

廿五日午前十一時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所  
油 盛

○國民黨星島二郎氏は本日労働組合法案を衆議院に提出せり。  
廿五日午後四時發

○  
○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

宛 所  
奉 天

廿五日午後〇時半發  
○秘密に辨らるべしと傳へられ居りし瀋陽線審判書昨日公表せられ本日新聞は一齊に該調査の一部を掲載せるが右記録は三千餘枚に達し居れば數日に亘つて連載さるべく議會開會中の事として一般より興味を以て迎へられつつあり。

○ ○  
東 方 通 信 發 信 電 報 寫

所 宛  
浦 豐 奉 天

一月二十五日午後五時發  
◎華盛頓二十四日發 極東委員は露國に鞏固なる政府の成立する  
と同時に露國領土より全然日本軍隊を撤退せしむることを約せ  
る日本の陳述を承引せり。